**第３４回観察会　2006年１月19日(木) 12:05～12:55　雪**

**テーマ『森で語ろう―京大植物園が育むサブカルチャー―』**

**☆**[**ガイドレポートその１**](http://ja3yaq.ampr.org/~bgarden/kansatu/kansatu34nakajima.pdf)

ガイド：中島和秀さん（京都大学理学研究科　京都大学附属植物園園丁）

**☆ガイドレポートその２**

今回の観察会には、初めてガイドという立場で参加しましたので、戸惑い、緊張しました。私は専門が人類学ですので、植物・昆虫に関する知識は、中途半端なものです。私は、ガイドとは、「時宜にあった適切な案内をし、正しい知識を分かり易く解説する」ことと思い込んでいましたので、幾度も植物園の下見をしました。通う毎に、来園の目的を忘れて、未知の植物園に出会い、夢中になります。しかし、他者に何かを喋るとなると、今この時期に、何をお「見せ」するのが良いのかは到底決められません。自らの知識不足と、統一的視点で、体系的に植物園の生き物たちの営みをスパッと切ることの難しさを痛感しました。これまでの観察会を担ってこられた今村彰生博士（総合地球環境学研究所）をはじめとする方々の達見とご努力を、改めて思った次第です。

さて、そうしたなかで、今回の『森で語ろう』という企画のアイデアが、植物園の園丁さんである中島さんらと、まさに「語り」あうなかから生まれてきました。８年以上、ほぼ毎日京大植物園に勤めてこられた中島さんは、「考える会」の観察会が始まるずっと以前から、さまざまな人々が、京大植物園に通ってきておられることを、日常勤務の中で経験的に知っておられました。その中には、自然科学の研究以外の目的で（あるいは特定の目的なしに）、園を訪れておられる方も多いのです。そういった方々から、それぞれの立場、経験に基づいた植物園への見方の一端を紹介して頂くことで、これまでの観察会で集中的に取り扱われてきた生物「学」的側面から、それ以外の人文社会現象すら含んだ『京大植物園』というまるごとの現象の理解へと、幅を広げあう一つのきっかけになれば、ともくろんだわけです。

今回の観察会では、観察会にも参加してくださっているそういった植物園の"隠れエキスパート"の方々から、様々なお話を聞くことができました。まず、園内を歩きながら、2002年に行なわれた植物学教室による伐採、枝打ちの現場の一部（その多くがその後の耐震工事などにより既に見ることができなくなってしまいました）を参加者に見て頂き、植物園に起こったできごとについて、振り返りました。1月19日当日は、大寒の前日でもあり、非常に寒い雪の舞う空模様でしたが、偶然にも午前中に植物園内で落枝の焼却処分が行なわれた後であったため、その後は、自然とその残り火を囲んでの集いとなりました。

中島氏と私の趣旨説明に始まり、北白川の琵琶湖疎水の生き物保全活動をされている方（京大植物園の池の水は、琵琶湖疎水から引かれています）や、散歩で植物園を訪れておられる方や、樹木の伐採現場に立ち会われた方から次々と植物園とのかかわり、植物園で見たこと、植物園への思いなどを紹介していただきました。

学内からは、文学研究科の教官の方から、学生時代から30年以上植物園に通ってこられた経験をもとに、植物園の魅力についてのお話がありました。遠く離れた時代や地域の文学研究では、同じ種ではなくとも近縁の植物種を観察することで作者の植物を用いた表現がより適切に理解できる可能性があること、日本語への訳が豊かになること、などの文学研究者にとっての植物園利用の研究教育上の価値について指摘がなされた上で、かつての植物園に比べ、最近の植物園は年々「魑魅魍魎」とした部分が減ってきていること、また散策者としては、アケビをはじめとした思いがけない「実のある」植物が減ってきていることなどの感想を挙げられ、植物園ぜんたいの魅力が減じてきているのではないか、というご意見を頂きました。

"おいしい"植物園のお話を誘い水に、近所にお住まいの方からは、少年時代には、もう一つ別の池があり、しばしばそこでタイワンドジョウ（40センチほどもあったそうです）を釣りあげ、食べていたこと、かつては、農学部グラウンドの近くまで植物園が広がっていて隠れん坊をしたこと、おやつにクルミの実をとりに植物園に来ていたこと、などのお話が次々に飛び出てきました。京大植物園は、長い間、植物好きな学生や研究者、大人だけではなく、地域の子供たちにとって"も"「実のある」遊び場であったのです。

今回の観察会で浮かび上がった過去、半過去、現在における「遊び場としての植物園」、「実のある植物園」という側面は、京大植物園が、単に生物学の研究教育用の施設として、周囲の自然環境はもちろん（例えば、第32回観察会『鳥と木の実』をご覧ください）、社会環境からも切り離され孤立して存在してきたのではないことを如実に示していると言えます。

人類学的に見ても、山間地など、もともと「入り会い」的な自然利用が『伝統』としてあった地域ではなく、大都会の中心部にある人の出入りの激しい学生街として、住民構成がつねに更新され続けているなかで、この植物園が、地域住民により一種のマイナー・サブシステンス（副次的生業活動）や遊びの場として、継続的に利用され、機能してきたということは、興味深いことであると思います。この植物園が、そもそも北白川扇状地の田んぼであったところに造られ、初期の代表的な研究成果が「水田内の微気象」であったということなどから考えれば、当初から京大植物園は、地域住民と深い関係を持ちながら歴史を刻んできたと言えるでしょう。このような歴史的観点は、「京大植物園は、はたして誰のものか？」という11月祭の植物園座談会の場で安部浩さんから提出された所有論的な問題を考える上でも、一つの重要な鍵になりそうです。

悲しいことですが、理学研究科による一般利用者はもちろん、研究教育のための利用者の入園手続きの煩雑化（2003年10月以降）は、このようなふつうの人びとと植物園とのつながりの歴史的、多面的側面を「学問的に解明」するどころか、無視したものであると言わざるを得ず、むしろ意図的にこれを切断しようとする試みである、と位置づけられるでしょう。

笹尾登前理学研究科長は、京都大学理学研究科ホームページの「[大学法人法雑感―就任のご挨拶に代えて－](http://www.sclib.kyoto-u.ac.jp/kusci/greeting.html)」の中の、「大学の社会的存在価値について」と題した一節で国立大学法人化問題に関連して、次のように述べておられます。

『…現実の「政策」が短期的経済優先主義の価値観に支配され、それを容認する「権威」により大学総体が評価され、また強制されることに対する危険性を我々は訴えてきた。一言で言うならば大学の存在意義は、批判的な見方も含めた多元的な価値観や見方を社会に提示することにある、との主張である。だが、この間大学は「批判的な見方も含めた多元的な価値観や見方を社会に対して提示する」ことが本当に出来てきたのであろうか？大学から社会に発信するメッセージに多様性が失われ、その色が褪せ、輝きが次第に失われてきているのではないだろうか？…』

また、同じ文章の中の「社会の変化と教育改革」の節では、こうも述べられています。

『第２番目の感想は、「教育」についてである。今回の国立大学法人化が大学に対して積極的効果を生むとすれば、それは教育面であろう。我々理学部について言えば、現実の学生の変化について無頓着に過ぎたのではないだろうか？個人的な感触では、この変化はおよそ10年前のいわゆる「理科離れ」が叫ばれていた時期に始まった。この頃から実験や実習において学生の「手」が動かなくなった。並行して学ぶことに対しての「貪欲さ」が徐々に低下した。様々な原因が取りざたされている。例えば、昆虫採集やラジオ作りに熱中することがおよそ不可能になった。身の回りから広い意味での「自然」が喪失したのである。…』

植物園問題に関わる、一連の理学研究科の動きを見れば、理学研究科の姿勢がこれら笹尾氏の肉声とはほど遠いものであった、と言わざるを得ません。京大理学部・理学研究科は、外に向かっては「国立大学法人化」を批判しながら、内では結局、「法人化」の論理に呑み込まれてしまっている、というのが現状なのではないでしょうか。

だいぶ、観察会の報告からは脱線してしまいましたが、最後に今後の課題として改めて感じたことを指摘しておきたいと思います。植物園を訪れる多くの人にとって、植物園は、密かな、とっておきの場所、いわゆる"すいば（好い場）"であった、と言うことです。法人化の荒波の中で、植物園を公的なシステムとして維持していくためには、「利用」の推進と「成果」が必要だと思います。しかし、植物園を「守る」ためにせよ、植物園の存在が世に広く知られ、利用が多くなるにつれ、個々人にとっての"すいば"としての価値は薄れていってしまうという可能性が否定できません。植物園の魅力が維持されつつ、多様な背景の人びとが植物園の恩恵を受け続けることができる、そして人びとの利用が植物園に還元されるような工夫が必要です。今後も、ガイドでもお客さんでもない「植物園ファン」どうしの相互交流のなかで、ファンの自然発生的な観察と触発の機会が増えることを期待するとともに、植物園の保全と持続的利用の問題に関して、研究利用以外の方にも当事者として、直接具体的な議論に加わって頂けるような回路を作っていく必要性を改めて強く感じた次第です。

花または結実が観察された植物（順不同）

蕾：ヤツデ、ヒイラギナンテン
開花：ツバキ、サザンカ
結実：マンリョウ、ホソバイヌビワ、センダン、フウ、オオアブラギリ（シナアブラギリ）、ヒイラギモチ、アオキ（未熟）、サカキ、タチバナ、ボダイジュ、トウサイカチ、ツクバネガキ（過熟）（以上、木本種）イノコズチ、ヤブミョウガ、ウバユリ（以上、草本種）

ガイド：大石高典さん(京都大学理学研究科生物科学専攻動物学系)

**☆参加者の感想**

参加者の感想文です。実名・匿名の指定がないかたはすべて匿名にいたしました。ご了承ください。

* 冬もいいですね～。楽しくてたまりません！　　　　　　　　　　（近所のかた　落合裕子さん）
* 久し振りに参加させて頂きました。今回は何か自分の気持ちのままにお話を聞かせて頂きました。ずい分昔からここにかかわっていられる方がおられてびっくりしました。私もこれからこの植物園に多く足をはこび、植物を知り楽しみたいと思います。よろしくお願い致します。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（北区のかた　今井教さん）
* 初めて参加しましたが、よかったです。ケータイで写真を撮りました。お気に入りの秘密の花園になりそうです。ありがとうございました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（近所のかた）
* どこに何の植物がどこにあるのか植栽図がみてみたい。その植物についての説明もあり。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（近所のかた）
* 参加された方のお話を聞けたことも興味深かったです。　　　　　　（近所のかた　中村佳子さん）
* 雪の舞う植物園で庭かけめぐり、又いろいろ教わりましたが、聞きのがす事も多いようです。でも欲ばらず楽しみながら、今年もよろしく。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（近所のかた）
* たき火にあたりながら話せたのがよかった。そういえば、私もたき火の灰をとちもちのあく抜きに使うためにいただきに来たのが植物園とのご縁でした。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（フィールド研院生のかた　坂本三和さん）
* 今日は昔を思い出す様な感じで散策致しました。年行くとアスファルトを歩いているよりも土の上を歩いている方が、気分が落ちつく感じがします。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（近所のかた）
* いままでとちょっと趣向が違っていて面白かった。ガイドの二人が自然体でよかった。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（学内の実名OKなのに無記名のかた）
* ２回目の参加ですが今後も参加させていただき、乏しい植物等の知識を仕入れたく思います。何卒よろしくお願い申し上げます。　　（近所のかた　山田喜代春さん）
* 植物園の歴史（痛めつけられた）の一端を話していただき、破壊側の大義名分が知りたくなりました。創設者の意思を、今一度、教えて下さい。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（地球研のかた）
* いろいろな企画を用意していただいて、さまざまな人たちに植物園への関心をもってもらえたらよいと思いました。　　　　　　　　（学外のかた　松川太一さん）
* おじ（伏見在住）からこの植物園の話を聞いていたので、観察会をのぞきにきました。京大にきたばかりですが、季節季節の変化が楽しめそうなのでまた来たいと思います。　　　　　　　　　　　　　　（理学部動物院生のかた）
* こういう環境は努めて守らないときえていくのだと思いました。　（学外のかた　落合祥堯さん）
* このような「参加型」の観察会もおもしろいと思いました。これだけ来ておきながらナナミノキの話など知らないことが多かったです。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（農学部昆虫院生のかた　嘉田修平さん）
* 火をたいているのをみてたのしかったです。人間は文化が進むと能力を失うので、ここへくると本来の人間に戻れる気がしました。　（近所のかた　近藤たみ子さん）
* 初めて参加しましたが、園の広さにびっくりしました。植物の知識が全くないので教えて欲しいです。植物を見る楽しさを教えてください。おもしろかったです。　　　　　　　　　　　　　　　　　（学内のかた）
* 冬は寒いものです。だからこそ人が集まったりたき火を作って暖をとったりするのではないでしょうか。部屋の中でぬくぬくと過ごすだけでは、四季があることも忘れてしまう。そんな事を感じました。（理学部動物院生のかた　清野未恵子さん）
* 知ってるつもりでいた植物園ですが、新たな魅力を見つけられました。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（京大本部職員のかた）
* 入園許可を事務室で即決して下さい。　　　　　　　　　　　　　（近所のかた）
* 楽しかったです。また参加します。花の季節に。　　　　　　　　（学内のかた）
* 昭和２８年林学科を卒業以来数十年振りで入った。　　　　　　　（近所のかた）
* 冬の植物園を散策できてよかったです。季節ごとにやってきて生態の変化に接したいと思います。　　　　　　　　　　　　　　　　（岡山のかた）
* こういう場所があることをまず知らなかったので、良かったです。また来ます。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（総合人間学部のかた　原宏輔さん）
* お話の中で、「植物園は地元のもの」というコメントに、この植物園が皆から愛されていることを感じました。　　　　　　　　　　（フィールド研院生　栫昭太さん）
* 都市の中に自然の木々植物の有る環境に触れて、その自然の香りを肌で感じました。私の少年時自宅が植物園のすぐ裏に有り、勝手に入りクルミの実を拾いに行った事を思い出しました。ひさしぶりに入園した感じは、以前はもっと、木々植物は多かった様に思いましたが。多く自然に有る方が魅力を感じると思いますが。　　　　　（近所のかた　松本尚男さん）